



HAL
open science

フランスにおける三島受容
Thomas Garcin, Daisuke Fukuda

► **To cite this version:**

Thomas Garcin, Daisuke Fukuda. フランスにおける三島受容. 三島小百科, 1, Suiseisha, 2021. <hal-04294728>

HAL Id: hal-04294728

<https://hal.science/hal-04294728>

Submitted on 20 Nov 2023

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

フランスにおける 三島受容

トマ・ガルサン
福田大輔

*編者注：本稿ではまずトマ・ガルサンによるフランスでの三島研究の概観を掲げ、ついで福田大輔によるカトリーヌ・ミヨー「シット・ジュネ・三島——倒錯の知性」の解説を掲げる。

一九八一年に出版された『三島由紀夫あるいは空虚のヴィジ
ン』(Mishima ou la vision du vide, Gallimard, 1981)と「ミヤル

グリット・ユルスナール (Marguerite Yourcenar) の有名な三島由紀夫入門書はフランス知識階級における三島に対する興味をよく示している。「豊饒の海」の結末を挙げながら、三島由紀夫の文学の中心には形而上学的な空虚が据えられていると述べるユルスナールは、三島の世界を構造化している理論を深く理解していたと言える。しかし、『三島由紀夫あるいは空虚のヴィジョン』が上梓された時期、フランスでは三島に関する知識はまだ浅薄だった。当時、日本語から直接翻訳された小説は四冊だけで『金閣寺』、『潮騒』、『宴のあと』、『午後の曳航』、英語から翻訳された『仮面の告白』や『豊饒の海』を数に入れ、でもフランス語で読める作品はわずか一〇冊に過ぎなかった。マルグリット・ユルスナールは三島由紀夫という人物よりもむしろ三島の作品そのものに光を当てた。しかし、他国と同じく、フランスでも三島研究における作家論と作品論の区別はあやふやだった。一九九〇年代には精神分析的なアプローチを優先して作品・作家論を組み合わせる論文が何冊も出版された。中にはカトリーヌ・ミヨー『シット・ジュネ・三島——倒錯の知性』(Catherine Millet, *Gide, Genet, Mishima: Intelligence de la perversion*, Gallimard, 1996)と「ミヤル」的なテーマ批評に基づいた興味深い本もあったが、作家・作品間の問題含みの連続性を捉えようとする傾向がまだ強かった。

このような状況の中、二〇〇〇年に出版されたアニ・セッキ『三島由紀夫——古典的な美学、悲劇的な世界』(Annie Cecchi, *Mishima Yukio: Esthétique classique, univers tragique*, Honoré

Champion, 1999) は新たなアプローチを示した。三島論における割腹自殺の過度の重視を批判し、テクスト(そのもの)に基づく研究を提案したのである。あいにく遺作で未完成の論文だったが、西洋ではあまり知られていなかった三島の文学論に依拠し、三島作品の文学的、美学的系譜を中心に、形式の考察という枠組みの中で作品の分析を促した点で同書はフランスの三島研究において大きな役割を果たした。とりわけ三島の「古典主義」のハイブリッドな性質をセッキは正確に記述している。

つまり彼の古典主義は日本の古典文学とヨーロッパのクラシズム(特にフランスのクラシック文学——ラシーヌ、サド、ラファイエット夫人と、ネオクラシック文学——ラディゲ、コクトー、ヴァレリー、モーリヤック)の双方から影響を受けた、まったく個性的なものだったと述べるのだ。三島の古典主義への憧れは「バロック調でロマン派的であり過ぎる傾向」に対する整流装置として機能したともセッキは指摘している。

現在、三島の長編小説一四編、短編小説一七編、戯曲七編がフランス語で読める。経験豊かな翻訳者ドミニク・パルメによる、二〇一九年の『仮面の告白』の新訳と二〇二〇年の『命売ります』の初訳が表しているように、三島作品の翻訳の努力は続けられている。ガリマル社から出たこれらの翻訳は、フランスの一般読者と専門家が三島へ向ける新たな関心をよく示している。リヨン大学日本語学科では二〇一五年と二〇一九年に三島についての博士論文が提出された。また、二〇一九年の一月二一〜二三日には「没後五〇年、三島由紀夫をご存知です

か?」(Fifty Years Later: Another Mishima?) という国際シンポジウムがパリ大学(元パリ・ディドロ大学)で開催された。三島由紀夫についての新しい研究やアプローチを紹介することを目的としたこのシンポジウムは、フランスにおける三島の現存性と三島研究の活力や熱気をよく証明するものだった。(トマ・ガルサン)

ラカン派の精神分析家でもあるカトリーヌ・ミヨー(一九四四-)は、『シット・ジュネ・三島——倒錯の知性』で母国フランスの作家シッドとジュネについて考察を試みたあと、文化的に親しみのない国の作家である三島について論じた(「悲嘆のエロティズム」の章)。そこでミヨーは、『仮面の告白』を用いて三島の幼少期に詳細な分析を施し、その知見を『金閣寺』と『太陽と鉄』に適用している。

それによれば、三島少年は、精神生活を支配する法(去勢)の範疇に収まらない女性(母親と父方祖母)の食欲で不吉な欲望に捧げられていた。彼女たちにとって三島は、人間であれば運命づけられている存在欠如と性的差異を消去する眩い輝き(ファルス)だった。三島にとっての最初の同一化の対象は汚穢屋で、糞便は大地に、大地は母なる大地に繋がるといふ象徴的連鎖をたどってゆけば、最後には癡猛な(母)という大他者の存在に逢着する。そこに開いた裂け目に供される犠牲者こそ三島であった。三島少年の目に映った汚穢屋の筋肉を隆起させた身体は、不在のファルスに自らを等しくすること、すなわち

その代理物として自らを屹立させながら死ぬという三島の原初
的幻想を表現している。これは戦場で倒れる若き英雄、キリス
ト教の殉教者、さらには現実世界における三島自身の割腹自殺
にまで連なっている。

しかし三島は、こうした傾向から離脱しようともしてい
た。女奇術士・天勝への同一化はその最初の試みである。天勝には
他者のまなざしを捉えて離さぬフェイクの魅力があった。この
女性性、他者のまなざしのフェティッシュとなることによつて
ファルスを持つているかのような幻影を与え、女性もしくは母
親の去勢の否認を体現できる存在だったのである。それは、虚
構の魅惑を維持しながら象徴的地位を占めることであり、この
天勝への同一化があったからこそ、後年の三島による作家とい
う職業選択や、演出家、映画俳優としての活動が引き起こされ
たとみなすことができる。

『金閣寺』では、柏木と溝口が、それぞれこの二つのポジシ
ョンを反復する。柏木は自らの完璧な美をもてあます女性たちの
フェティッシュとなるというシニカルな立ち位置をとる。しか
し、溝口の立ち位置はことなる。彼は亡父が夢見た金閣寺の美
の純粹さに魅惑された果てに、その裏側に横たわる大地の醜悪
さを垣間見る。そして、金閣寺の住職になれという母親の欲望
に反抗して、金閣炎上という象徴的な母親殺しを行なった。
『太陽と鉄』では、天勝的な奇術としての作家活動を離れて、
ポディビルという「肉体の言語」が探求される。それは汚穢
屋への同一化の延長上にあると考えられるが、『金閣寺』でも

『太陽と鉄』でも、天勝と汚穢屋の存在論的矛盾の解決には至
らず、死だけが最終的に残された道となる。

著者のミヨーは、ラカンに分析を受けたことがあり、後にラ
カンの愛人ともなったが、優れた文才と文学への深い愛情によ
つて、ラカンの影響圏から離れたところで活躍する特異な存在
である。本書の読解は、ラカン派のみならず、フランスでの三
島作品の精神的読解の方向性を決定づけた。(福田大輔)

三島由紀夫とドイツ

縄田雄二(構成・統括)
イルメラ・日地谷キルシュネライト
レベッカ・マック

ここで紹介するのは、ドイツ語で書かれた三島由紀夫研究と、
日本語で書かれた、三島由紀夫とドイツ文学・ドイツ思想の関
連についての研究である。

前半で取り上げるのは、ドイツを代表する日本学者のひとり、
イルメラ・日地谷キルシュネライトの出发点となった博士論

文と、二〇一〇年三月にベルリンでシンポジウム「ミシマー——
その国際的インパクトと複合文化的源泉」を主宰するなど、こ
んにち世界的水準で三島研究を精力的に推し進めている彼女が、
ゲルハルト・ビーアヴィルトと編んだ論集、およびベルリン自
由大学フリードリヒ・シュレーゲル文学研究大学院に提出した
レベッカ・マックの博士論文である。この三冊をそれぞれの著
者・編者が自ら論じた文を以下に収める。ちなみに、レベッ
カ・マックの論考については本書第IV部所収のマイケル・K・
ポードッシュの論文で言及されている。
後半においては、私(縄田)が館野日出男、林進、高山秀三
の研究書あわせて五冊を解説する。

1

イルメラ・日地谷キルシュネライト『三島由紀夫「鏡子
の家」——文脈内分析の試み』(Imela Hijiya-Kirschneric
Mishima Yukio's Roman „Kyōto no ie“: Versuch einer intratextuellen
Analyse. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1976, 308 S.)

評: イルメラ・日地谷キルシュネライト

『三島由紀夫「鏡子の家」——文脈内分析の試み』は、ポーフ
ムのルール大学東アジア学科に提出された博士学位請求論文で
あり、学位認定後に単行本として出版された。三部構成の本書
の第一部では、七〇年代初頭に至るまでの西洋諸言語、および